



## 第2次豊田市文化芸術振興計画【改訂版】 計画の進捗管理（主な取組36事業2022年度の実績報告）

※評価欄について：○＝指標1を達成している  
△＝指標1は達成していないが、指標2が事業目的に寄与している  
×＝指標1・2ともに達成状況に課題がある

### ■ 総評

第2次文化芸術振興計画【改訂版】初年度として、コロナ禍の影響が続き鑑賞者数等は減少傾向が続いたが、各取組自体は感染症対策を徹底しながら継続し、概ね順調に遂行することができた。今後、計画のめざす姿を実現していくにあたり、従来からの方策に、コロナ禍に得られた新たなノウハウ等を加え、さらに多くの市民を巻き込みながら、目標達成に向け計画的に事業に取り組んでいく。

なお、改訂版から新たに設定した「定性的指標」については、所管課により評価内容にばらつきが生じているため、次年度は今年度の例を示しながら、事業の実施目的に寄与する評価となるよう、改善を検討する。

■施策Ⅰ〈みる・ふれる〉多様な鑑賞・体験機会の拡充 12事業

施策の方針 (1) 気軽に文化芸術に出会う機会の充実 / (2) 幅広い分野の文化芸術に親しむ機会の拡充 / (3) 公共的空間等の活用による文化芸術の浸透

【総括】コロナにより鑑賞者数が少ない状況は続いたが、新たな体験機会や新しい企画を取り入れることで、普段文化芸術に触れることがない層に対して気軽に「みる・ふれる」機会を創出した。特に、子どもたちの鑑賞・体験機会が著しく減ることがないよう、感染症対策を徹底し事業を展開した。

NO.	主な取組 内容	指標1 (定量的指標)			指標2 (定性的指標)		評価	所管
		現状値 (把握年度)	方向	2022年度実績	成果の評価に用いることができる状態等	2022年度実績		
1	クラシック音楽普及啓発事業 (か〜るクラシック、親子対象コンサート等)	鑑賞者数 5,216人(2019年度)	↑	6,082人	参加者の声 (興味を持ったなど)	・ワンコインでこのクオリティの演奏が聴けるとはとても素晴らしい。 ・もっと聞いたことのある曲を演奏してほしい。	○	文化振興課
2	能楽普及啓発事業 (わくわく能楽体験、小中学生のための能狂言鑑賞会等)	鑑賞者数 955人(2019年度)	↑	916人	参加者の声 (興味を持ったなど)	・能楽を身近に感じることができ、実演が見たくなった。 ・講座は能楽の理解が深まり、今後、より面白く公演を見ることができそう。 ・能狂言の解説が分かりやすくて楽しめた。	△	文化振興課
3	クラシック音楽・能楽地域活性化事業 (学校等へのアウトリーチ活動)	鑑賞者数 1,379人(2019年度)	↑	1,056人	参加者の声 (興味を持ったなど)	・本物の音楽を生で聴き、体験することは、貴重な経験だった。 ・アーティストとの交流は、社会の多様性を知る良い機会になった。	△	文化振興課
4	クラシック音楽・能楽地域活性化事業 (出前コンサート、ロビーコンサート)	鑑賞者数 2,026人(2019年度)	↑	1,398人	参加者の声 (興味を持ったなど)	・身近な場所で気軽に生演奏を聞くことができ貴重な機会だった。 ・ロビーコンサートの回数をもっと増やしてほしい。(現状/年10回程度)	△	文化振興課
5	おいでんアート体験フェア	参加者数 6,200人 (2017年度)	↑	2,065人	—	(補足説明参照) —	×	文化振興課
6	クラシック音楽鑑賞事業	鑑賞者数 10,373人(2019年度)	⇒	6,614人	—	(補足説明参照) —	×	文化振興課
7	能楽鑑賞事業	鑑賞者数 3,357人(2019年度)	⇒	1,894人	—	(補足説明参照) —	×	文化振興課
8	美術館展覧会開催事業	観覧者数 261,615人 (~2020年度まで直近4年度平均)	⇒	205,676人	観覧者の声 (興味を持った、満足度の充実など)	・世界的に有名な作品を、豊田市で鑑賞できて嬉しい。 ・混雑していたので、もう少しゆったり鑑賞したかった。	△	美術館
9	美術館での教育普及事業 (アーティストトーク・講演会等の開催)	参加者数 1,149人 (2019年度)	⇒	1,995人	—	(補足説明参照) —	○	美術館
10	美術館での教育普及事業(作品ガイドボランティアによるギャラリートัวร์)	参加者数 2,570人(2019年度)	↑	1,981人	—	(補足説明参照) —	×	美術館
11	民芸館展覧会の開催	観覧者数 13,188人(2019年度)	↑	14,464人	観覧者の声 (興味を持った、満足度の充実など)	・展示作品の素晴らしさに感動した。 ・癒しの場であり、また足を運びたいと思う。 ・関係する民芸品の販売数が少ない。	○	博物館準備課
12	とよた市民アートプロジェクト (まちなか芸術祭の開催)	①来場者数 2,685人 ②会場数 8か所 (2020年度)	↑	①4,483人 ②10か所	まちの雰囲気向上、まちの人の声 (興味を持ったなど)	・今まで知らなかった場所に訪れるきっかけとなり、楽しめた。 ・気軽に立ち寄れる場所に作品が展示されていたので、初めてアートを鑑賞した。 ・子どもと一緒に話しながら楽しめて良かった。 ・一時的ではあるが、アート作品やパフォーマンスの鑑賞、本のフリーマーケットなど、文化芸術が持つ特有の力で、まちの雰囲気や魅力が向上した。	○	文化振興課

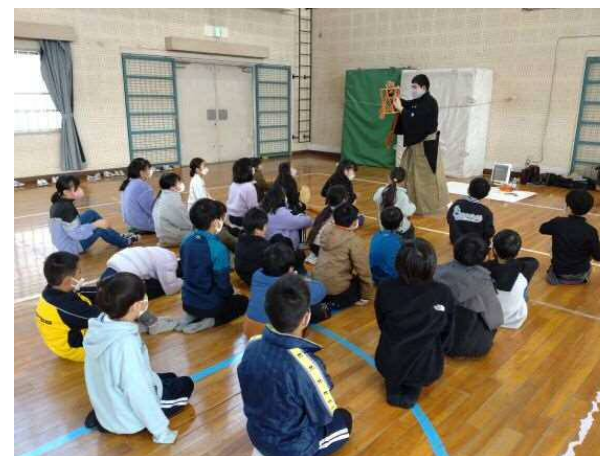
＜指標1と指標2の補足説明＞

目標とする方向に遅れのある事業 (×) について

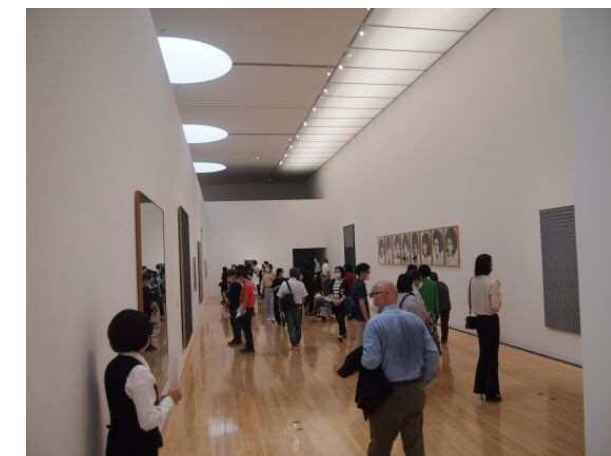
- No.5「おいでんアート体験フェア」  
コロナ対策で、事前予約制としたため、参加者数が減少した。今後は、安全・安心な運営と、参加者の増加が両立できるように、予約制のあり方を含め検討する。
- No.6「クラシック音楽鑑賞事業」、No.7「能楽鑑賞事業」  
海外アーティスト招聘の1公演のみ中止となった。コロナ前と同じ収容率100%で各公演とも開催したが、以前のような集客とはならなかった。今後は、一定のファン層に加え、無関心層の掘り起こしにつながるような公演を企画するなど、鑑賞者増加のための取組を強化していく。
- No.10「美術館での教育普及事業」  
コロナ対策で人数制限を行ったため参加者数が減少した。今後は、社会状況を注視しながら人数制限を解除し、参加者の増加を見込む。

目標とする方向に順調な事業 (○・△) について

- No.1「クラシック音楽普及啓発事業」  
親子向けコンサートの企画・開催により、大幅に鑑賞者数が増加した。
- No.9「美術館での教育普及事業」  
アーカイブ配信やオンライン配信をすることで、大幅に参加者数が増加した。



No.3 クラシック音楽・能楽地域活性化事業 (アウトリーチ活動)



No.8 美術館展覧会開催事業



■施策Ⅱ <つくる・つたえる> 活発な創作活動の推進 10 事業

施策の方針 (1) 市民の創作・発表機会の充実 / (2) 若手芸術家の発表機会の充実 / (3) 文化活動団体間の交流と連携の促進

【総括】市民美術展は、過去最多の応募者数があり、コロナ禍においても市民の創作活動が活発に行われたといえる。また、同美術展が 60 回目を迎えるにあたり記念展を開催し、歴代受賞者や、若手芸術家などの発表機会を充実させた。さらに、コロナ禍により青少年音楽団体の発表機会がここ数年減っていたが、2022 年度は地域のイベント等で演奏する機会が増えるなど、徐々に活動機会が戻りつつある。

NO.	主な取組 内容	指標 1 (定量的指標)			指標 2 (定性的指標)		評価	所管
		現状値 (把握年度)	方向	2022 年度実績	成果の評価に用いることができる状態等	2022 年度実績		
13	豊田市民美術展の開催	応募者数 388 人(2019 年度)	⇒	420 人	傾向 (創作意欲の向上、応募者の変化など)	・10 代、40 代、80 代の応募者が増加した。 ・高校への積極的な働きかけにより、10 代の応募者が増加傾向にある。	○	文化振興課
14	高齢者作品展の開催	応募者数 405 人(2019 年度)	↑	277 人	傾向 (創作意欲の向上、応募者の変化など)	・コロナにより応募者数は減った (高齢者リスク大) が、「作品いいね!カード」を来場者が記入し、出展者に渡すことで、創作意欲の向上に繋がった。	△	市民活躍支援課
15	障がい者作品展の開催	応募者数 704 人(2019 年度)	⇒	694 人	傾向 (創作意欲の向上、応募者の変化など)	・日頃の努力を覚えてもらうこと、作品を多くの方に見てもらうこと (展示会の開催) が、応募者の励みとなり、自信に繋がっている。	○	障がい福祉課
16	少年少女合唱団の運営	団員数 126 人(2020 年度)	⇒	98 人	卒団員のその後の活躍	・卒団後もコンサートでの演奏サポートやパンフレット作成などにより、団運営を支えている。 ・卒団員でコーラスグループが結成された。 ・音楽指導者として活躍している。	△	文化振興課
17	ジュニアオーケストラの運営	団員数 (うち市内) 55 人 (19 人) (2020 年度)	↑	45 人 (14 人)	卒団員のその後の活躍	・名古屋フィルハーモニー交響楽団の団員として活躍している。 ・豊田市の小学校でアウトリーチ活動を実施した。 ・豊田市民コンサートホールの登録アーティストとして活動している。	×	文化振興課
18	ジュニアマーチングバンドの運営	団員数 87 人(2020 年度)	↑	84 人	卒団員のその後の活躍	・卒団後も現団員の指導やチラシ作成などにより、団運営を支えている。 ・卒団員が保護者となり、保護者会で活躍している。	△	文化振興課
19	舞台芸術人材育成活用・創造事業 (とよたこども創造劇場)	参加者数 45 人(2019 年度)	⇒	21 人	修了者のその後の活躍	・スタッフとして指導側に回り、運営を支えている。 ・とよた演劇ファクトリーを受講し、役者としてさらに学びを深めている。 ・人前での発言が苦手だったが、この事業で克服し、社会で活躍している。	×	文化振興課
20	舞台芸術人材育成活用・創造事業 (とよた演劇ファクトリー)	参加者数 32 人(2019 年度)	⇒	18 人	修了者のその後の活躍	・多くの修了者がとよたこども創造劇場やとよた演劇ファクトリーのスタッフとして参加し、運営を支えている。 ・修了者や受講生が集まって劇団を立ち上げ、自主公演を行っている。	×	文化振興課
21	民芸の森活用事業	出展者数 3 組 (2019 年度)	↑	2 組	—	(補足説明参照) —	×	博物館準備課
22	おいでんアート体験フェア【再掲】		↑	30 団体	—	(補足説明参照) —	○	文化振興課

<指標 1 と指標 2 の補足説明>

目標とする方向に遅れのある事業 (×) について

●No.17「ジュニアオーケストラの運営」

団員が減少し、団員だけで交響曲を演奏することが難しい状態が続いている。募集方法や活動体系など、団員数が増加するための対策を講じるとともに、学校部活動の地域移行に伴う、活動の受け皿の一つとして PR し、特に市内の団員の増加につなげていく。

●No.19「とよたこども創造劇場」、No.20「とよた演劇ファクトリー」

演劇は感染リスクが高いと敬遠され、参加者が減少したと考えられる。社会経済活動の回復に合わせ団員募集に力を入れるとともに、とよたこども創造劇場については、学校部活動の地域移行に伴う活動の受け皿の一つとして PR し、団員の増加につなげていく。

●No.21「民芸の森活用事業」

出展者を募集する事業数を年度ごとに決めており、2022 年度は 2 組の募集としたが、民芸館主催の事業を実施したため、全体としては活用できていると言える。

目標とする方向に順調な事業 (○・△) について

●No.22「おいでんアート体験フェア」

2022 年度は、舞台でのパフォーマンス体験等を加えたことで、出展者数が増加した。計画改訂時 (2021 年度) に実績がなく、現状値が設置できなかったため、今後は 2022 年度 (30 団体) を現状値として評価を行う。なお、参考数値として、2021 年度の出展者数は 17 団体だった。



No.16 少年少女合唱団の運営



No.19 舞台芸術人材育成活用・創造事業 (とよたこども創造劇場)

■ 施策Ⅲ <むすぶ・つなげる> 活動する人々の連携とまちの活性化への展開 8 事業

施策の方針 (1) 創造的な活動を推進する市民主体の体制づくり / (2) 文化芸術による地域資源の再発見と発信 / (3) 文化芸術と様々な関係分野との有機的な連携

【総括】 とよたデカスプロジェクトや農村舞台アートプロジェクトでは、地域資源の魅力を発信するとともに、地域や福祉施設等に企画者が赴くことで、アートを通じた新たなつながりが生まれた。また、学校への文化活動者派遣事業やアウトリーチ活動等により、教育・福祉等の現場と連携した取り組みを進めた。活躍する市民を様々な分野・人とつなげ続けることで、まちの活性化につなげていく。

NO.	主な取組 内容	指標 1 (定量的指標)			指標 2 (定性的指標)		評価	所管
		現状値 (把握年度)	方向	2022 年度実績	成果の評価に用いることができる状態等	2022 年度実績		
23	とよた市民アートプロジェクト【再掲】	プロジェクトメンバー 累計 201 人 (2020 年度)	↑	201 人	—	—	△	文化振興課
24	とよたデカスプロジェクト	応募数 27 件 (2019 年度)	⇒	26 件	—	—	○	文化振興課
		鑑賞・体験者数 5,467 人	↑	10,690 人	まちに起こった変化	・子どもたちが運営協力した企画では、地域住民と子どもたちが知り合う機会となり、普段の生活の中でも挨拶をするようになった。 ・子ども向けの企画では、子どもたちが地域を知る貴重な機会となった。 ・コロナ禍で関係が希薄になった地域において、アートを通じて人が集うようになった。	○	
25	農村舞台アートプロジェクト	鑑賞者数 2,480 人(2019 年度)	⇒	244 人	まちに起こった変化	・活動が途絶えていた伝統芸能が、140 年ぶりに復活した。 ・地域のお祭りにおいて、農村舞台を活用するようになった。 ・怒田沢の諏訪神社寶楽座では農村舞台寶楽座協議会が発足し、歌舞伎等を定期的に開催している。	△	文化振興課 (文化振興財団)
26	小原和紙の後継者育成事業	育成事業の修了者数 累計 11 人 (2020 年度)	↑	1 人	修了者のその後の活躍	・和紙工芸体験館指導員となり活躍している。 ・作家となり、市内外の美術展に出品し入選した。 ・芸術大学の非常勤講師となり、学生に指導している。	△	小原支所
27	学校への文化活動者派遣事業	鑑賞・体験した児童数 4,747 人 (2019 年度)	↑	1,422 人	鑑賞者の声 (興味を持った子どもなど)	・体験を通して文化芸術を楽しく学ぶことができた。 ・授業で習った曲を生で聴くことができ、感動した。 ・生徒と一緒に学ぶことができ、参考になった。 ・本物に触れることで、子どもたちの世界が広がった。	×	文化振興課
28	クラシック音楽・能楽地域活性化事業 (アウトリーチ活動)【再掲】	①学校の会場数 6 か所 ②福祉施設の会場数 4 か所(2019 年度)	⇒	①11 か所 ②0 か所	—	—	○	文化振興課
29	クラシック音楽・能楽地域活性化事業 (出前コンサート)【再掲】	福祉施設の会場数 5 か所 (2019 年度)	⇒	3 か所	—	(補足説明参照)	×	文化振興課
30	美術館庭園活用事業	来場者数 10,504 人(2019 年度)	↑	5,928 人	—	(補足説明参照)	×	美術館

<指標 1 と指標 2 の補足説明>

目標とする方向に遅れのある事業 (×) について

●No.27 「学校への文化活動者派遣事業」

コロナ禍により選択できるプログラム数が減少したこと、受け入れる学校数も減少したことにより、参加児童数が減少した。今後は、学校の授業内容を踏まえたプログラム内容とすることで、参加校数の増加を見込む。

●No.29 「出前コンサート」

出前コンサートとしての開催件数 (10 件) は例年と同じだが、コロナにより開催を希望する福祉施設が減少した。

●No.30 「美術館庭園活用事業」

2019 年度は庭園でのマルシェを美術館無料観覧日に合わせて開催したが、2022 年度はコロナ禍により、無料観覧日を設けていないため来場者数が減少した。

目標とする方向に順調な事業 (○・△) について

●No.24 「とよたデカスプロジェクト」

オンライン配信での観覧者が多く、鑑賞・体験者数が大幅に増加した。ただしコロナで、直接体験できる人数は限られるものが多かった。

●No.25 「農村舞台アートプロジェクト」

コロナ禍に伴う財源不足により、アートとパフォーマンスを、隔年開催に変更。2022 年度はパフォーマンスのみ実施し、鑑賞人数も限定したため減少した。しかし、事業を 10 年以上継続していることで、多くの方が地域資源の魅力に気付き、様々な活動が生まれてきていることは、大きな成果と言える。



No.25 農村舞台アートプロジェクト



No.26 小原和紙の後継者育成事業



■施策Ⅳ〈つかう・いかす〉文化芸術活動を支える基盤整備 6事業

施策の方針 (1) 施設環境整備による安全性・利便性の向上 / (2) 文化芸術活動拠点としての情報発信 / (3) 施設職員の専門性強化

【総括】ハード面の整備に関しては、文化ゾーン整備や、コンサートホール・能楽堂の大規模修繕の設計を関係各課等と連携しながら着実に進めた。また、ソフト面においては、市民ライターによる文化芸術情報誌の発行や、人材育成事業を行ったが、より市民に届けられる情報発信のあり方や、事業内容の企画等について検討の余地があるため、改善を続けていく。

NO.	主な取組 内容	指標1 (定量的指標)			指標2 (定性的指標)		評価	所管
		現状値 (把握年度)	方向	2022年度 実績	成果の評価に用いることができる状態等	2022年実績		
31	文化ゾーン整備事業	2023年12月末までに文化ゾーン内のサイン設置完了	—	サイン計画の作成	—	(補足説明参照) —	○	文化振興課
32	コンサートホール・能楽堂大規模修繕の準備	適切な大規模修繕のための設計完了	—	基本設計完了	—	(補足説明参照) —	○	文化振興課
33	文化施設のメディア掲載 (テレビ、新聞、雑誌、ウェブ等)	掲載数①テレビ ②新聞 ③雑誌 ④ウェブ	↑	①30 ②219 ③170 ④157	—	—	○	美術館 博物館準備課 文化振興課
34	とよたアートプログラム (TAP) マガジンによる文化情報発信	ウェブサイト閲覧数 14,451回	↑	22,286回	広報媒体や取材がきっかけに生まれた交流など	・アートの取材を通じ、その関係者が市民ライターに加わった。 ・市内で活動しているアーティスト同士がお互いに興味を持つきっかけになった。 ・アーティストを紹介する記事が、アートイベントでの作品展示につながった。	○	文化振興課
		市民ライター数3人 (2020年度)	⇒	4人				
35	民芸館・民芸の森の運営を担う人材育成事業	—	—	—	民芸館・民芸の森の運営を担う人材の育成状況	・講座の受講生が、講師を手伝う人材になった。	△	博物館準備課
36	施設職員の事業企画力・コーディネート力の向上	—	—	—	魅力的な自主事業の展開	・助成金を活用し、特別な演目の公演を開催した。	△	文化振興課 (文化振興財団)

<指標1と指標2の補足説明>

目標とする方向を置いていない事業について

●No.31「文化ゾーン整備事業」

まちなかから文化ゾーンへの誘導や、文化ゾーン内の回遊を促進するためのサイン計画を作成。2024年度の博物館開館※に向けて順調に進んでいる。

※2023年度1月開館が4月に延期となった。

●No.32「コンサートホール・能楽堂大規模修繕の準備」

2022年3月末に「基本設計」が完了し、大規模修繕に向けて順調に進んでいる。

●No.35「民芸館・民芸の森の運営を担う人材育成事業」

手仕事の講座受講をきっかけとして地域の伝統工芸を広めていき、その過程で運営を担う人材が育つよう働きかけている。

●No.36「施設職員の事業企画力・コーディネート力の向上」

「劇場職員セミナー2023」に参加し、広報に関する講義を複数受講した。Web広報やSNSの活用について広報担当者で情報共有し、積極的に投稿、声掛けをするようになった。

目標とする方向に順調な事業 (○・△) について

●No.34「TAP マガジンによる文化情報発信」

投稿記事数を増やし、閲覧リピーターも増えていることから、全体の閲覧数が増加した。また、2019年度から地道に活動を続けていることで、認知度も上がり、取材の依頼を受けるようになった。

その他 (指標1の現状値が設定されていない事業について)

●No.33「文化施設のメディア掲載」

現状値の把握が困難で設定できていなかった。今後は2022年度を現状値として評価を行う。



No.32 コン서트ホール・能楽堂大規模修繕の準備



No.33 民芸館・民芸の森を担う人材育成事業